

江戸時代の知識人 寺門静軒

— 郷土熊谷から文化の花を咲かせる —

熊谷市教育委員会 熊谷市立江南文化財センター 主任(学芸員) 山下 祐樹



江戸時代後期、埼玉県北部に居住し、同地域における教養文化さらには教育の分野で大きな貢献をした人物が、寺門静軒(1796-1868)である。

静軒は、儒学者、漢詩人として江戸で活躍したことで知られる。寛政8年(1796)、水戸藩蔵奉行の寺門弥八郎勝春の次男として誕生し、弥五左衛門という通称のほか、漢詩人として「克己」及び「蓮湖」と記した作品も残されている。

文化4年(1807)、静軒は同居の母を失い、翌年には水戸の実父が死没し、母方の祖父母に養育された。青年期、山本緑陰に儒学を学び、上野寛永寺の勸学寮に入門し仏典と漢詩を学んだと伝わる。30代半ばにして、仕官への登用を求めるが途中で断念し、詩文において「無用之人」を標榜するようになった。この頃から著作が増え、経世の学への探究を進めるとともに、江戸を代表する文人として名声を獲得し、神田駿河台に私塾「克己塾」を開設した。

静軒は江戸の文壇と多くの接点を持つ中で、代表作『江戸繁昌記』を著した。同書は、5編5冊の分量で、江戸の習俗文化について批判精神に基づいて風刺的に記している作品で、繰り返し印刷され、「繁昌記」という分野の流行を生み出した。しかし、同書の刊行が、天保の改革に際しての処分対象となり江戸から離れることになった。他の著作には、『太平志』(1834)、『静軒詩鈔』(1838)、『江頭百詠』(1850)などがある。

静軒は江戸から離れ、各地を訪れ見聞を深める放浪の旅を続けた。文化人や地元有力者の交流と配慮によって、上州や北武蔵地方にも多く来訪した。特に熊谷地域(妻沼、熊谷、大里)における静軒の足跡は後世に影響を与える重要な契機として語り継がれている。

天保13年(1842)、静軒は、奈良村四方寺(現在の熊谷市四方寺)の慈善事業家の吉田市右衛門邸を来訪した。同年には、熊谷宿本陣竹井家や忍城下行田の医家遠藤家、島村(現在の群馬県伊勢崎市)の絵師・金井烏洲などと交流している。静軒は各地来訪の途上であったが、自著の『静軒文鈔』に示されるように郷土との関わりを重視していたことが分かる。

嘉永3年(1850)、彼は漂泊の旅から江戸に帰還したが、定住するのではなく、時々、各地に出向し経学を講じ、旧友との交情を温めるなどしていた。新潟にも居住し、文筆を進めた。静軒の影響が各地に多面的に残っている背景には、放浪の旅で果たした地域との文化交流の側面

が大きいと考えられる。

万延元年(1860)、静軒は、武蔵国北部の妻沼村(現在の熊谷市妻沼)に居を移して「両宜塾」を開いた。「両宜塾」は、彼が『両宜塾記』に示した、「宜しく老い、宜しく学ぶべし」という校訓が語源となっている。塾生には、松本萬年、竹井澹如、石川弥一郎などが挙げられ、新時代の熊谷で活躍した人物を多く輩出した。



〈寺門静軒像〉

静軒は塾にて約6年間教え、近隣の妻沼聖天山とも親交を深め、滞在した際に多くの書画を残している。

慶応3年(1867)、静軒は熊谷宿の石上寺に転居し講義を続けた。一方、両宜塾では、静軒の後任として江戸の時期から既に師弟の間柄であった松本萬年が指導者を務めた。萬年に師事した人物の一人に、日本初の女性医師として活躍した荻野吟子が挙げられる。学びと教育による社会の改善という静軒の意識が萬年を通じて吟子へと継承されている。

最晩年、静軒は荒川以南の青山村(現在の熊谷市青山)の豪農で幕末の志士の一人、根岸友山に迎えられた。友山の開いた私塾「三餘堂」が根岸家邸内にあり、ここで静軒は人生最後の時期を過ごすことになる。

『静軒詩撰』の中には、「武州青山に遊び、易を根岸氏の三餘堂において講じ」と示されている。友山の息子、武香は好古家と知られ、静軒との交流が歴史学の世界へと導いたといわれている。静軒から学んだ人物は多く、郷土の文化振興と学術探究の師として、後進に大きな影響を与えた。

慶応4年(1868)3月24日、静軒は死去し、根岸家墓所に隣接して葬られた。73年の激闘の一生を終えた静軒の足跡によって、次世代躍進のための原動力が熊谷に根付き、新たな学術文化が開いたのである。

【主な参考文献】

佐藤雅美『江戸繁昌記:寺門静軒無聊伝』実業之日本社2002・永井啓夫『寺門静軒』理想社1966・竹谷長二郎訳著『江戸繁昌記 寺門静軒』教育社1980・根岸友山・武香顕彰会編『根岸友山・武香の軌跡:幕末維新から明治へ』さきたま出版会2006